

論文審査の結果の要旨

論文提出者氏名 清水 拓野

清水拓野氏の論文「現代中国の伝統演劇学校の民族誌的研究—陝西省西安市の秦腔を事例として—」は、中国伝統演劇・秦腔の俳優教育について、①芸能が学校教育のなかで伝承される時、その教授・学習過程にどのような特徴がみられるのか、また、②芸能教育の学校化とはいかなるものか、という問いを文化人類学的に考察するものである。本論文は清水氏が2000年9月から2002年9月にかけて、西安市とその近郊農村で行った現地調査に基づいている。

各章の概要は以下の通りである。第一部の序論で上記の問題設定をおこなった後、第二部「基本情報」の第二章「陝西省西安市と秦腔の概要」で、秦腔の芸能的特徴、歴史的背景と現状、民俗文化との関わりなどについてまとめている。第三章「俳優教育の概略と調査の基本情報」では、秦腔の俳優教育の歴史的変化、特に中華人民共和国建国後の教育政策が詳述される。

つづく第三部「エスノグラフィー」では、上記の俳優教育の具体的特徴について、詳細な記述がおこなわれる。第四章「稽古現場からみた俳優教育」においては、稽古現場というミクロな次元を観察し、「稽古の過程」、「教育目標」といった諸項目に着目しつつ、俳優教育の特徴を微視的に記述・分析している。この章では、秦腔の俳優教育における特性を他の芸能との共通性と差異を意識しつつ、詳細な分析をおこなっている。

第五章「組織的文脈における俳優教育」では、入学から卒業までの過程を、「人材選別」という観点からとらえ、俳優教育の特性を、稽古現場を取り巻く演劇学校という組織的文脈のなかで詳しく分析している。「入学の過程」、「役柄選別と役柄別修業」等の過程に注目し、秦腔独自の人材選別過程の特徴を詳細に描いている。

第四部第六章「芸能教育の学校化についての考察」では、上記②のテーマをとりあげ、芸能教育が学校化するとはどういう意味をもつのか、そして徒弟教育と学校教育はどういう形で相互に影響を与えつつ、変化していくかについて論じている。ここでは比較のために、民営演劇学校等の事例も加味しつつ、教授法や師弟関係にみられる顕著な歴史的变化を中心に、その意味を考察している。また、学校化に関するこうした考察が、従来の芸能学習論や徒弟教育研究の枠組みに対して、どのような理論的示唆をもたらさうかという点にも検討を加えている。

以上を踏まえて「結論」では、本研究から得られた芸能教育の教授・学習過程、および、芸能教育の学校化に関する知見についてまとめると同時に、身体教育や芸能教育分野における研究の今後の展望についても述べている。

本論文の学問的意義は、第1に、秦腔という、日本人に殆どなじみのない、中国伝統演劇での俳優養成課程について、非常に詳細な民族誌的な記述を行ったという点である。

従来こうした芸能研究は、多くの場合、文献をもとにした歴史的研究か、あるいは短期的滞在による印象論的なルポルタージュといった報告に限られる傾向があり、清水氏の民族誌的研究は、この分野では画期的なものである。第2に、演劇、民俗芸能、徒弟教育関連の人類学研究といった分野であまり正面から取り上げられなかった、学校組織のなかでの芸能伝承という側面を詳細に分析したという点である。学習者の身体面や学校の制度的制約といった要素にも留意しつつ、その諸側面を多角的に記述している点である。第3に、徒弟制から学校への変容過程が、「師弟関係の変容」や「学習と労働の関係性の変容」といった点に止まらず、諸学校間の教育格差、学校化そのものについての現地での賛否両論といった、多様な諸相を明らかにしたという点である。こうした知見は、学習理論、教育人類学、芸能研究といった様々な分野に、重要な知見をもたらすことが期待される。

審査委員会においては、量的なデータの不足、徒弟制と学校教育という対比の図式性への疑問、さらに当事者の枠組みと分析者のそのの弁別の不十分さといった点についての指摘もなされた。しかしこれらは、本論文全体の価値を損なうほどの瑕疵ではないことが審査員全員によって確認された。したがって、本審査委員会は博士（学術）の学位を授与するにふさわしいものと認定する。